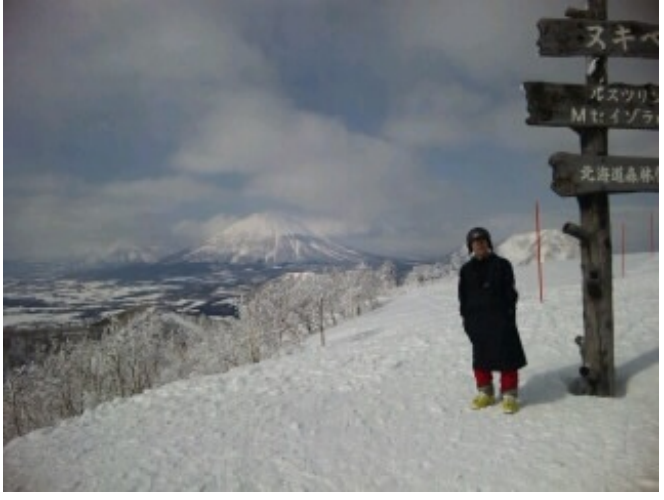

無人島へどの本をもっていくか？

　無人島へ一冊だけ本を持ってゆけるなら何を選ぶかという問いがある。

ぼくならしばらく迷った末ホメロスの「オディッセイ」と答える。迷うのはホメロスのもう一つの傑作「イリアス」への強い愛着のせいだ。
そんなわけでゴールデンウィークに沖縄の離島のいくつかを自転車旅行した時、すでに一度読んだオディッセイの英訳版から四十数葉を切り取り持参した。物語は、ギリシャの英雄オディッセウスのトロイ戦争からの帰国談で、島々を巡りながら奇想天外な冒険を経てようやく故郷イタカ島に帰るというもので、島々を巡る旅の友としてもぴったりしたものだった。
　朝から雨の時はテントの中で、日中にスコールが降りだした時はあずま屋などの中でオディッセイを読んだ。そのうちにぼくは自分が主人公のオディッセウスになったふりをするのを楽しむようになり、今いるのはエーゲ海に浮かぶ孤島だとも念じた。
　そんなある午後、伊良部島の渚の公園でパンク修理をしていると白い運動靴が目の前に近づいてきて「おじさん、パンク？」と聞いた。「そう」と言って見上げると風にそよぐ髪の毛で顔を半分覆われているが気品のある顔だちの女生徒が薄く開けた目でぼくを見おろしている。すぐにあと三人ばかりが集まってきてぼくのまわりにすわると口々にぼくや東京のことなどを聞き始めた。中学生かと聞くと、みな笑って高校二年生だと言った。エキゾチックな美しさを持つ少女たちだが最も印象的なのはやはり最初に声を掛けてきた気品のある子だ。内に大きな自信を秘めているような落ち着きがうかがえる。
　オディッセウスは異国に泳ぎ着いて身も心も疲労困憊していた時、川口でボール遊びをする少女たちの一群に身を投じて助けを求めるが、他の少女らは怖がって蜘蛛の子を散らすように逃げたのにナウシカだけは堂々と彼に直面し話を聞く。髭をのばし妙ないでたちをしパンク修理で汗だくのぼくの前にやってきて話しかけたこの気高い島の美少女をナウシカと呼ぶことにした。
　パンクの修理の見込みがたたないぼくは、近くに自転車屋はないかと聞くと、あるよと言ってナウシカが案内してくれることになった。こうしてオディッセウスはナウシカの自転車のハンドルをとり、彼女は後ろに横乗りし片手でパンクしたタイヤを持ってくれた。ホメロスのナウシカは、悪い噂の流れることを嫌ってオディッセウスに自分よりずっとあとからついてくるように指示したが、ぼくのナウシカはそのようなことを気にしない。言われるままに迷路のような道筋を島の奥に進んで行くと、民家には明かりが灯り始めていた。
自転車屋に着くとナウシカはそこの女将さんと話を交わす。「どこの家の娘さん？・・・ああ、あそこの子・・・きれいやは・・・」
ぼくはナウシカに感謝し、気をつけて帰るよう言って帰らせた。ペダルをこいで去ってゆく後ろ姿をいつまでも見ていると、沈みゆく夕陽を後ろから浴びてオレンジ色に輝くナウシカの両足が映画のラストシーンの「終」の字のような印象でたそがれの中を浮かび上がってきた。
終わり